

【解題】

法政大学鴻山文庫蔵「鷺流間狂言附」(五〇―一三) 二冊

写本。袋綴。帙入。紺表紙(二五・七×一六・八糎)。表紙は大部分摩滅。第一冊横長題簽剥落、第二冊目左肩薄茶色題簽(九・九×二・九糎)に「國栖」と墨書。本文料紙は厚手の楮紙。半丁九行二十四字。第一冊、目録二丁、遊紙一丁、本文墨付一一三丁、内題所収曲曲名(六十二曲)、奥書「爾時元文四^巳未^巳弥生廿日書之\本間氏久近」、裏表紙見返し裏に「間本 忠太郎」という墨書あり。第二冊、目録二丁、本文墨付六十丁、内題所収曲曲名(六十二曲)、奥書「爾時元文四^巳未^巳歳皐月七日書之\本間氏久近」。各冊目録一丁目に朱角蔵書印「本間蔵書」、本文一丁目に朱角蔵書印「鴻山文庫」、裏表紙見返しに墨印あり。第二冊には大小十枚の薄様紙片が挟み込まれており、それぞれ間狂言台本の一部が墨書されている。

本書の本文は漢字片仮名混じりで文字の横並びが揃うように非常に丁寧に記述されている。内題の下に簡略なシテ装束付を付し、曲によっては、本文中に、割注として型付を挿入している(特に第二冊に多い)。また内題上の曲番号、庵点、句点を朱墨で書き入れている。本文・装束付・割注は同筆だと思われるが、朱書は後人のものである(第一冊「京落葉」の内題したに「此曲四十ノ陀羅尼落葉トハ別曲ニシテ稀曲ナリ丸岡氏謡曲解題二〇五頁ニアリ」という朱書もあるが、これは他の朱書とは別筆)。本書については、すでに『鴻山文庫蔵能楽資料解題 下』(法政大学能楽研究所編、二〇一四年)の中で解説されており、仁右衛門派の台本であること、帙裏に江島伊兵衛の「本間久近ノ名ハ本間系凶ニハ見ズ」の考証メモの通り、書写者の本間久近については未詳であることが述べられている。ただし、近年の諸藩能楽史研究の進展によって、本書の性質もかなり明らかたになってきた。

この本間久近は米沢藩芸者組の狂言方であった。米沢藩の芸者組については、寛政有江本との関わりから、田口和夫が「上杉文書に見る米沢藩芸者組と有江九十郎」(『能・狂言研究』三弥井書店、一九九七年)の中で考察している。この論考の中で紹介されている上杉家文書「分限帳」の中に、本間力弥・本間孝助という本間姓の役者が見えるが、「久近」の名は確認できない。しかし、近年刊行された宮本圭造編『近世諸藩 能役者由緒書集成(上)』(能楽資料叢書5、二〇一九年)「米沢藩上杉家の能役者由緒書」の中に、米沢藩芸者組狂言方本間家の資料が整理されており、久近が本間家として芸者組狂言方を勤めた最初の人物であることが確認できる。

三人御扶持 古名忠古、後忠右衛門与相改

一五石九斗五升

本田忠悦

久近

この後に書かれている久近の経歴を要約すると、次のようになる。七代藩主上杉宗房(英徳院)の時、無給の御茶道を勤めていたが、御林方を勤めていた父の忠蔵が、「山一卷」

の取り扱いに不調法があり、元文三年（一七三八）に改易となる。その時、忠古は御近習になるが、同五年に御茶道に復帰し、名を忠悦に改める。延享三年（一七四六）に宗房が亡くなると、組外御扶持方となり、名を忠右衛門と改める。寛延元年（一七四八）に芸者組となり、宝暦十三年（一七六三）まで勤めた（以上の内容は米沢市上杉博物館蔵天明五年（一七八五）『勤書』に記されているとのこと）。なお、本書裏表紙見返し裏に見える「忠太郎」は、久近の嫡子である（米沢市上杉博物館蔵文化十四年（一八一七）『勤書』による）。

以上の経歴を踏まえると、本書は久近が芸者組に任命される以前に書写されたことになる。芸者組に加わる前の久近が、どのように狂言と関わっていたかは判然としないが、芸者組となる寛延元年にはすでに三十代であったことを想像されるので、その歳で狂言の稽古を始め役者になったとは考えがたい。幼少もしくは青年期には狂言を嗜んでいたと考えるのが自然であり、それを示すのが本書となるだろう。

この久近の経歴のみで本書の成立背景は明らかであるが、本書の注記からも米沢藩との関係が垣間見られる。第二冊目には、本文・型付以外に三つの注記が見える。

A 間\誰ニテ渡候ゾ シテ富士カユクヘヲ御存候カ 間\扱ハカタ\ハ富士カ
ユカリノ人ニテ候カ其由申ウスルアイタト云ヘシ 元禄五年九月二十八日白金
御能ノトキ仰出サル々由（二十七 富士太鼓）

B 是ハ鷺流ニ間無依之金剛太夫所ヨリ書付記之貞享三年十月十九日記之（三十
蟬丸）

C 金剛流ニ而已シテニテ「縄トク故心得申候」ト云所入用無し（挟み紙片 巻
絹）

Aは元禄五年の演能で《富士太鼓》のアイの台詞が加わったことがわかる記事だが、「く由」とあるので、久近が伝聞したものを書き留めたものだろう。なお、「白金御能」は氷川神社の近くにあった麻布白金米沢藩下屋敷での演能のことだと考えられる。

残りの二つは金剛流に関わる記述である。江戸時代に金剛流を採用していた藩は少なく、しかも鷺流と結びついていたことを踏まえると、容易に米沢藩が思い浮かぶので、この注記からも書写背景も一端を知ることができるだろう。Bの《蟬丸》は、徳川綱吉・家宣時代に演能が多くなった曲であるが、間狂言の台本の出自を知る上で興味深い記事だといえる。なお、金剛流は『享保九年書上』の段階で《蟬丸》を所演目に加えておらず、「流儀無之能」に含めている。本書は、この《蟬丸》だけでなく遠い曲（上演機会が少ない曲）の間狂言を多く所収している点に特徴がある。それらの曲を挙げると、以下のようなになる。

「第一冊目」吉野優婆塞・佐保山・維盛・碇潜・京落葉・空蟬・陀羅尼落葉・藤・伏木曾我

「第二冊目」国栖・小原御幸・鳥追舟・二人祇王・太刀堀・太刀堀葵・竹之雪・草紙洗草子・吉野静・水無瀬・愛染川・護法・大江山・禪師曾我・籠太鼓・丹後物狂・高野物狂・春永・藤永・七騎落・咸陽宮・雲雀山・満仲・壇風・横山・錦戸・清重・住吉詣

いずれも金剛流の所演目に含まれないだけでなく、諸流の書上にも上がらない番外曲も含まれており、綱吉・家宣時代の演能を反映したものだと思像される。

さて、米沢藩の芸者組狂言方としては有江家が知られており、台本も残されている（本狂言台本は観世文庫蔵、間狂言台本は米沢市立図書館蔵）。本書所収曲は、この有江本と近似する。有江本には年記がなく、書冊末に「有江正実」の署名があるが、人物は天保九年（一八三九）に家督を相続した江戸時代最末期の有江家当主である（米沢市上杉博物館蔵弘化二年『勤書』芸者組。『近世諸藩 能役者由緒書集成（上）』）。すなわち、書写年代時代は有江本の方が遅い可能性が高いが、両書の関係はもっと複雑のようである。有江本は墨や朱墨で振り漢字や型付を書き入れている曲が多いが、一部の曲では文句の訂正も見られる。《高砂》の訂正箇所を比較すると、次のようになる（「」は加筆・訂正箇所）。

【鷺流間狂言付】

＼此所ノ者如何様成御事ニテ「御座」候ゾ＼心得申候＼当浦ノ者才尋ハ。如何様成御用ニテ御座候ゾ＼是ハ思ヒモ寄又事才尋成ル、物哉。我等モ此所ニハ住者ナレド。左様ノ御事睨トハ存モ致サス候。去乍始タル御方ノ才尋有ヲ。一円二存セヌト申モ余リナレハ。片端聞及タル通申上ウスル（高砂）

【有江本】

此所の者如何様成御用「事」にて候そ 心得申候 是はおもふも寄らぬ事お尋有物哉。我等も「当浦に住者なれと」左様の御事しかとハ存も致す候。さりながら初たる御方もお尋有を。一円にそんぜぬと申も餘りなれハかたはし聞及たるを物語申さうする（同）

有江本の加筆・訂正箇所を本書と比べてみると、有江本が本書に近いかたちに改編していることがわかる。所収曲を見ると、本書が特殊な時代を反映している間狂言台本であったとも考えられるが、もう少し、曲数を広げて考察する必要がある。

この点は両者の関係を精査するだけでなく、他の仁右衛門派の台本との比較も必要だが、本書は江戸中期から後期の鷺流仁右衛門派間狂言台本の変遷や米沢藩の能楽史を考える上でも有益な資料だといえる。